

青木淑子さん（富岡町3・11を語る会）

■ 活動内容

NPO法人「富岡町3・11を語る会」の代表として、富岡町民が震災の記憶を語る「語り人(かたりべ)活動」を行っています。また、「語り人」の活動や富岡町から避難している方々と受入れている郡山市の方々の交流を図る場として、「人の駅 桜風舎」を運営しています。他にも、富岡町内にある「交流サロン」の運営も支援しています。

■ 活動を始めたきっかけ

私は郡山市在住ですが、震災前に4年間、県立富岡高校の校長をしていました。原発事故で町民の多くが郡山市に避難して来られた際に、ビッグパレットふくしまでボランティア活動を始めました。その後、避難所に開設された「おだがいさまセンター」（避難者の生活復興支援をする組織）のアドバイザーとして活動してきました。

平成24年の秋頃より、日本を訪れた東南アジアなどの海外の学生から「震災の話を聴きたい」という要望が寄せられました。当初は、富岡町民の方々は、思い出すとつらく話したくないという声が多かったので、センターの職員が話をしていましたが、町民の方々の理解を得て、平成25年4月から町民自らによる「語り人活動」を始めることとなりました。その後、大学ゼミや企業研修、中高生の教育旅行の利用も増え、平成27年4月にセンターから独立した組織になりました。昨年度の利用者数は1万人を超えました。



「避難者と受け入れ地域が交流することで、今もある誤解が解ければ。」と期待する青木さん



富岡高校の学生寮「桜風寮」にちなんで名づけられた「桜風舎」の看板(左)と団体ロゴ(右)

復興のパイオニア（復興女子編）

■ 活動を通じて思うこと

「語り人活動」は、語り人の「自分の震災体験を話すことで、誰かの役に立ちたい」、「避難時に全国から助けってもらった。全国から聴きたいと言われれば応えたい」という想いに支えられ、語り人の生きがいとなる有意義な活動だと実感しています。最初は、時間内にまとまった話ができない方も多く、3ヶ月ほど研修しましたが、回を重ね上手すぎる位になられています。高齢の方が多いのですが、活動中は服装や歩き方がしっかりし、とても元気です。

また、富岡町内の「交流サロン」は、帰還開始前に設けられたことがとても意味のあることだと思います。一時立入りで戻られた方の交流の場となり、多い日は1日に100名以上も訪れています。離れ離れになっていた知り合いの方や帰還予定の方と会話されることで、帰還を迷っている方が、「富岡町に帰れるかもしれない」という気持ちになることもあります。

今後、頑張りたいことは、交流拠点の充実です。語り人の多くは富岡町に帰還される予定なので、郡山市の「桜風舎」だけでなく富岡町にも拠点を設け、帰還後も活動しやすい体制にしたいです。

■ 復興庁について

独立した組織となり、資金や人材の確保が課題です。助成金の仕組みが、スピーディでわかりやすくなることを希望します。

復興庁は、「[『心の復興』事業](#)」を通じ、「富岡町3・11を語る会」の活動を支援させていただきます。



「語る会」事務局のメンバーで打合せをする（左から）青木さん、波多江さん、富岡町出身の長沼さん

「おだがいさま工房」で作られた草木染めや布製品なども販売されている「桜風舎」内部



【人の駅 桜風舎（富岡町3・11を語る会）の問合せ先】
所在地：郡山市長者1-7-17 さくらビル3F
電話：024-955-6760